

## ◇ 国 語

国 1-1～国 1-17 まで 17 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ガブル・ブレイス<sup>(註)</sup>によれば、「消費者主権」という経済学の最も基本的であったはずの概念が、現代ではまったく通用しなくなっている。消費者主権とは、「経済システムは消費者に奉仕するものであって、その消費者が経済を最終的に支配する」という考えと定義されている。簡単に言えば、消費者に欲しい物があって(ジュユウ)、それを察知した生産者がその物を生産する(供給)、こういった構造を当たり前だとするのが消費者主権という考えである。

当然ながら、現代ではそうなっていない。消費者の側に欲しい物があって、それを生産者が供給するなどというのはまったくの事実誤認である。

ア 数年前まで問題なく使っていたパソコンとそのソフト。なぜそれをいまも使うことができないのか？ これ以上ワープロソフトが進化したところでほとんどの利用者には関係がない。ワープロソフトの利用者が一年ごとのソフトの進化を望んでいるわけではない。ソフト会社が「こんどのバージョンにはこんなキノウ<sup>キノウ</sup>がっていますよ」「すばらしいでしょ」「欲しいでしょ」と言っているにすぎない。利用者の欲望を作り出しているにすぎない。

ガブル・ブレイスが言うように、現代社会の生産過程は、「生産によって充足されるべき欲望をつくり出す」。そして新しいソフトには高キノウのパソコンが必要になる。そうして、まだまだ使えるパソコンが毎日、山のように捨てられる。この構造はほとんどの産業に見出される。

ガブル・ブレイスはこう言っている。「一九世紀のはじめには、自分の欲しいものが何であるかを広告屋に教えてもらう必要のあるひとはいなかったであろう」。

ガブル・ブレイスは以上の説を唱えた際、他の経済学者たちから強いテイコウ<sup>テイコウ</sup>を受けたという。多くの経済学者にとっては、人々が欲望を抱いていて、それに産業が応えるというのが自明のモデルであったからだ。

イ、この消費者主権のモデルを信じて疑わないというのは能天気<sup>ネンテンキ</sup>に過ぎる。

たとえば、一九世紀ドイツの労働運動の指導者にフェルディナント・ラッサールという人がいる。彼は「ヤケイ国家<sup>ヤケイ</sup>」という言葉をはじめ使ったことで有名である。

彼は一八六二年の時点で既に資本主義の特徴を次のように説明していた。以前は欲求が供給や生産に先行していた。欲求が供給や生産を引き起こし、かつ決定していた。今日では生産と供給が欲求に先行し、これを強制している。つまり、欲求のために生産されるのではなくて、世界市場のために生産されるのである。

既に一九世紀半ばの時点でこのような生産体制は自明のものであったのだ。ガルブレイスの指摘はむしろ遅すぎたというべきかもしれない。

いまではガルブレイスの言うことは常識に属する。ウな響きすらあるかもしれない。とはいえ、そうした考え方が受け入れられていなかった時点で、これを分かりやすく提示したことは大いに評価されねばならない。

だが、納得がいくのはここまでだ。彼がこの分析から引き出した結論には大いに疑問が残るのである。どういふことか詳しく見ていこう。

ガルブレイスは「ゆたかな社会」を分析しながら、消費者主権モデルの崩壊を指摘すると同時に、その社会のなかに一つの「希望」を見出している。彼の言う「新しい階級」がそれである。

ガルブレイスによれば、人類はこれまでさまざまな手段を使って、「労働は労働しないことと同じように楽しいのだ」と人間に信じ込ませようとしてきた。しかしことごとくそれに失敗した。やはり多くの人にとって労働とは、不愉快であつてもやらざるを得ないものなのだ。

ところが、そうではない人たちがいる。彼らにとっては仕事は楽しいのが当然である。彼らはハウシュウの多少にかかわらず最善の努力をする。給料が重要でないわけではない。だが、彼らにとっては何よりも他人から尊敬されることこそが、仕事における満足の重要な源泉になっている。

そうした人々こそ、ガルブレイスの言う「新しい階級」である。簡単に言えば、仕事こそがエだと感じている人である。

この階級は閉じられていない。この階級から離れる人はほとんどいないが、毎年何千人も人がこの階級に入ってくる。「準備のための十分な時間とかねに恵まれた青春時代をもち、正式の学業をパスしていくだけの才能さえもった人ならば、誰でもこの階級の一員になれる」。

ガルブレイスによれば、一九世紀初頭のイギリスやアメリカで「新しい階級」を構成していた者は、ごく少数の教育者と牧師、作家やジャーナリスト、芸術家だけであった。また、『ゆたかな社会』の初版が書かれた一九五〇年代にはそれは数千人だけであった。しかし、同書の第四版が出た一九九〇年代には、その数が数百万人にまで増えたと言う。

彼は当然この変化を好ましく思っている。だからこの階級を急速にいつそう拡大することこそが社会の主要な目標の一つであると彼は結論する。所得が増えることよりも仕事が増えることを目指すべきではないか？ たしかに分らないではない。それどころかそれに同意する人は多いだろう。

だが、ガルブレイスの提案には大いに疑問が残ると言わねばならない。仕事が増えることはたしかにすばらしいかもしれない。だが、仕事が増えることと、「仕事が増えるべきだ」と主張することは別の事柄である。

このように述べるのはなぜかと言え、ガルブレイスの提案には大変残酷な側面があるからだ。しかも彼自身はその残酷さを残酷さとして理解できていないようなのだ。

「仕事が増えるべきだ」という主張は、仕事においてこそ人は充実していなければならないという強迫観念を生む。人は「新しい階級」に入ろうとして、あるいは、そこからこぼれ落ちまいとして、過酷な競争を強いられよう。ガルブレイスは次のように述べている。

新しい階級の子どもたちは小さい頃から、満足の得られるような職業——労働ではなくてたのしみを含んでいるような職業——をみつけることの重要性を念入りに教え込まれる。新しい階級の悲しみと失望の主な源泉の一つは、成功しえない息子——退屈でやりがいのない職業に落ち込んだ息子——である。こうした不幸に会った個人は、社会からぞっとするほどのあわれみの目でみられる。

そのどこにどういふ問題があるというのか？ なぜ彼はあわれみの目で見られなければならないのか？ そんな視線の持ち主の差別意識こそ、私たちはあわれみの目をもって眺めてやるべきだ。

そして、そういう見方がまるで当然であるかのように書くガルブレイスに対しても同じことを言わねばならない。彼が自らの

差別意識に気づかないのはなぜなのか？ また、なぜ「新しい階級」が新しい強迫観念を生むことに無頓着むとんちやくでいられるのか？ しかも彼は、このようにして新しい強迫観念、新しい残酷さの存在を認めたくさず、次のように述べてそこから目を背けるのだ。

しかし新しい階級はかなりの防衛的な力をもっている。医者の子がガレージの職工になることは稀である。たとえ彼がどんなに不適格であろうと、彼はほそぼそながらも何とか自分の階級の中にすれすれに生きることができよう。

こんなずさんな主張がどうして経済学者の口から出てくるのだろうか。「新しい階級」からこぼれ落ちる人間などたくさんいるに決まっている。そしてまた、仮に「息子」がそういうこぼれ落ちた人間なのだとしても、彼はいかなる劣等感も感じる必要などない。当たり前だ。

にもかかわらず、彼は周囲の「あわれみの目」によって劣等感の方へと追い詰められていくのだ。まったく恐ろしい事態である。そのような劣等感を生み出すプレッシャーを作り上げ、また増長しているのは、「新しい階級」が拡大していくべきだとするガルブレイスのような経済学者の主張に他ならない。

あきれたことにガルブレイス本人も次のように述べている。「この階級の一員が オ 以外にはハウシュウのない通常の労働者に没落した場合の悲しみにくらべれば、封建的な特権を失った貴族の悲しみも物の数ではないであろう」。その通りだ。そしてガルブレイスよ、よく聞け。君こそがこの「悲しみ」を作り上げているのだ。

(國分功一郎『暇と退屈の倫理学』による)

(注) ガルブレイス アメリカの経済学者。カナダ出身、ハーバード大学教授、主著『ゆたかな社会』、『不確実性の時代』など。

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ジュヨウ

- ① ジュドウ的な性格
- ③ ジュキョウ思想を学ぶ
- ⑤ 卒業証書をジュヨされる

② 労働のジュバクから逃れる

④ ヒツジュ品をそろえる

1

B キノウ

- ① 人生のテンキとなる
- ③ 数学的キノウ法
- ⑤ キガイを加える

② キカイな夢にうなされる

④ キカイ体操の競技会

2

C テイコウ

- ① テイタク飛行
- ③ 法律にテイシヨクする
- ⑤ テイボウを建設する

② テイコク主義戦争

④ 会議をテイコクに始める

3

D ヤケイ

- ① ケイサツ官にあこがれる
- ③ ケイベツに値する行為
- ⑤ ケイカクを立てる

② ケイカン条例を審議する

④ 大企業のケイエイ者

4

E ホウシユウ

- ① ホウモン販売
- ③ 施政ホウシン演説
- ⑤ コクホウ級の展示物

② ニユースのゴホウを詫びる

④ ホウカツ的な条約

5

問一 空欄 [ア]・[イ]・[ウ]・[エ]・[オ] に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

[ア]

- ①なぜなら
- ②たとえば
- ③それから
- ④だが

[6]

[イ]

- ①したがって
- ②だからといって
- ③ところで
- ④しかし

[7]

[ウ]

- ①陳腐
- ②自明
- ③手遅れ
- ④能天気

[8]

[エ]

- ①労働
- ②不愉快
- ③消費者主権
- ④生き甲斐

[9]

[オ]

- ①劣等感
- ②あわれみ
- ③給料
- ④仕事

[10]

問三 傍線部（一）「まったくの事実誤認である」とあるがそれはなぜか。その理由について最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

11

- ① 「消費者主権」という概念が、経済学の進歩によって忘れられてしまったため、現代では通用しなくなっているから。
- ② 製品がいくら進化しても、ほとんどの利用者には関係がないため、実際に消費者が欲しい物が上手く供給されないから。
- ③ 現代社会の生産過程は、新しい製品が生産されることで、消費者の欲望が作り出される構造であるから。
- ④ 一九世紀初頭には、自分の欲しい物が何であるか、広告屋に教えてもらう形で消費者の欲望が生じていたから。

問四 傍線部（二）「これを強制している」とあるが、「これ」の指示内容として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

- ① 生産
- ② 欲求
- ③ 世界市場
- ④ 供給



問五 傍線部(三)「仕事が充実することと、「仕事が充実するべきだ」と主張することは別の事柄である」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

①所得が増えることよりも仕事が充実することを目指すべきだとしても、仕事がなければ所得がないので仕方がないということ。

②仕事が充実するべきだと提案するガルブレイスは、仕事内容の過酷さや残酷さを理解できていないということ。

③ガルブレイスの主張は仕事において人生を充実させねばならないという強迫観念を、人々に強いることになるということ。

④新しい階級に入ろうとする過酷な競争を強いられることになり、仕事にやりがいや充実感など得られないということ。

問六 傍線部(四)「なぜ彼はあわれみの目で見られなければならないのか？」とあるが、筆者はどういう意味でこのように言っているのか。説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

①新しい階級の子どもたちが小さい頃から満足の得られるような職業を目指したものの、不成功に終わったという悲しい現実、他人の責任であるので、他人があわれみをかける必要はないという意味。

②新しい階級の子どもたちが、退屈でやりがいのない職業に落ち込んだということは、過酷な競争から逃れるという面もある。同情の必要はないという意味。

③新しい階級の子どもたちが、父親からの失望と悲しみを引き受けほそぼそながら生きていくことは立派なことであって、あわれみの視線をなげかける方が差別意識を持っているのだという意味。

④新しい階級の子どもたちがたとえやりがいのある仕事を得られなくとも、そのことを不幸だとして差別的な扱いを受ける理由はなく、当人が劣等感を抱く必要はないという意味。

問七 本文の内容と合致しないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ①ガルブレイスが否定した「消費者主権」は、多くの経済学者にとって自明のモデルであった。
- ②ガルブレイスは「消費者主権」のモデルの崩壊を指摘し、「新しい階級」に希望を見出した。
- ③ガルブレイスによれば、一九九〇年代の英米において「新しい階級」は急速に拡大していった。
- ④ガルブレイスは、「新しい階級」を貴族同様に、労働を免れた特権階級ととらえている。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ことばというものは、ことに日常語の場合、語尾によって多彩<sup>げんらん</sup>絢爛<sup>こうよう</sup>に光耀<sup>こうよう</sup>するように思うのだが、これは私が上方弁<sup>しんじつ</sup>に親昵<sup>しんじつ</sup>しているため、そう思うのであろうか、ほかの方言ではいかがであろう。

明治政府が唱導強制した標準語・共通語はいち早く上方にも広まって、私などが小学生のころ（昭和十年代はじめ）は、もう大阪弁を使うのは品がわるく無学な ア のように思う気風が、大阪の若いインテリの間にあつたように思う。

それでも祖父母や父などはそんなことに関係なく、「そうでっか」「知りまへん」などとやっていたが、私の母は岡山から大阪へ嫁に来た者で、かつ小学校の先生の経験もあつたから、若いインテリ（と自負している）心に、標準語を上等のように思ったのであろう、子供の私が、

「そうやしイ」「あかんしイ」

などというと、下品な言葉を使う、と叱られた。

他国者の母はさておき、父の若い弟妹、私の叔父叔母（みなまだ独身であつた）たちも精いっぱい、東京風のコトバを使おうと気取っていたが、どうやっても追つ払えないのが語尾変化であつた。もちろんアクセントやイントネーションはよけい変えにくい、大阪弁の語尾を東京風にするというのは、むつかしい以上に、首をくくりたくなるような恥ずかしさがある。お芝居のセリフをしやべらされてるようになり、言葉の生命力が失われてしまう。

祖父がついに、

「じやらじやらした怪<sup>こ</sup>つ態<sup>たい</sup>なコトバ使うもんやない！」

とイツカツしてわが家の言語近代化運動、方言キョウセイ運動は イ になつてしまった。しかく、上方弁を上方弁たらしめているのは語尾の多様さによるとつくづく思わせられるのである。

標準語の会話だと、

「だ」(だよ。だな。です)

「わ」(わね。わよ)

「ね」(よね。だね)

「よ」

「ぜ」

「かい」(かね)

「よな」

ほかに、「だろ」でしよう、「打消しの「せん」「ない」ぐらいだろうか、上方弁ではこれが二倍ぐらいにふくれ上ってしまふ。そして、粘稠度ねんじゆうどのたかい語尾が一つつくさえややこしいのに、二つ三つとうち重なってくつき、意味を微妙に変化させてゆくのであるから、使うほうはいいが、聞き取るのが他郷人であるとまことに煩わしいことであろう。

さて、上方弁でいちばんよく耳につくのは「や」ではなからうか。語尾だけでなく会話の中ほどに、「だ」で繋ぐつなところがみな「や」になるので、ヒンシュツリツはかなり高い。

「お医者さんはもうアカン、言わはったんや、そうや、けど、何や、知らん間アに持ち直したんや、」

この「や」は「そやそや」とかいうように「や」止めで終るのが多いが、この下に更に「やんか」「やわ」「やな」と変化し、推量的に「やろ」と使われるから、「やろな」も生まれてくる。

もしわてが死んだらもらいはるやろな (河村日満)

という川柳の「やろな」である。この川柳では女言葉であるが、「やろな」は男も使い、「そやろな」といったりする。

「やんか」はやや品下れる言いさまであるが、威勢がよい女言葉である。これがちよつと標準語におきかえにくい語感であつて

「誰がそんなこというてん」

「あの子やんか！」

といったりし、「じゃないか」と翻訳すべきか。私などが子供のころに何か咎め立てとがされると、

「知らんやんかいさ！ ウチ！」

などと言いつ返し、何と下品なと母にチメチメされるたぐいの言葉であったのだ。牧村史陽氏の『大阪ことば事典』では「やんか」は「やないか」がつまったもの、とある。女にも鉄火言葉があるのだ。

大阪弁でもっとも愛用される女言葉は「やわ」であろう。「やな」というと、男言葉になり、女でこれを使うのは、かなりウチウチの場合。

私は対談などで興が乗ってきてつい、「やな」と言ったのがそのまま原稿になるので、冷汗をかいて「やわ」に直したり、いつそ「です」にしたり、している。「やな」というのは目上や親しくない人には失礼に当る。

もともと、「や」そのものが ウ 言葉なので、気の張るところでは使わない。

「でっせ」「だっせ」「だす」という敬語が、私ぐらいの年代を境に死語になったいまは、「そうや」をていねいにいうと「そうです」になって、半分標準語になってしまうから、「や」という語尾自体、ふだん着のもの、それで今更のように気付いたけれど、上方弁を使う若い人（言語年代では、私も若い世代に入る）は敬語は標準語を借用し、ふだんの日常慣用語は上方弁ですませているようだ。

もともと、上方弁には、全ての動詞に「はる」をくつつけると敬語になってしまう。カンベンなしかけがあって、

「行きはりますか」「いま、見てはる」「言わはる通りします」

などと使える。これを全部標準語におきかえると、

「いらっしやいますか」「いま御覧になっていられる」「おっしゃる通りします」

などと、言葉そのものが全然ちがうものにかわってしまう。上方弁では、語尾だけ標準語にして、「はる」とくつつけるとい

う、「新式考案ツープース仕立てキモノ」といった按配あんばいの言葉を使ったりしている。

「わ」は標準語と同じ使い方であるが、上方弁の特徴は男も使うことであろう。それで以て、小説を書くときは、よく氣をつけないと文字の上からでは男か女か分からない。

「やっぱりいくのんかいな」

「ふん、いくわ」

などとこのへんは性差のない言葉で、はじめの「かいな」が女、「いくわ」が男でも使える。

小説を読みなれぬ読者が、大阪弁の小説は男が女みたいな言葉を使うからきらいだといわれたりするのも尤もともである。字面からみればこの「ワ」という、やわらかいニュアンスがうまくひびかないので、単に女言葉と思われてしまうが、これは男・女を超えて、人の耳にテイコウなくさわりなく、和やかにまるく入る「ワ」である。

「そんなこと言うたらあかんわ」

というとき、この「わ」は断定ではなく、氣弱なるジヨウホフの余裕が仄見ほえる。もしそれ、人のいうことを断固、受けつけぬ、おのれはおのれの道をゆく、というときは、

「あかんで」

となる。「で」になると制止の意味合いも帯びて来るし、決意を示す。「したらあかんで」のほかに、

「オレ、行くで」

止めたって止まらへんぞう、という意気にもなる。

私は男が使う大阪弁の「わ」が好きなのである。男性というのは抛なつておいても、圭角稜けいかくりょう々となりやすいものであるから、コトバから柔媚じゅうびになるのは、まことに床しく好もしく、かえって男のよさを際立たせることになる。

(田辺聖子『大阪弁おもしろ草子』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A イツカツ

- ①カツゼツが悪い
- ②意見をトウカツする
- ③カイカツな性格
- ④弟子をイカツする
- ⑤平和をカツボウする

16

B キョウセイ

- ①キョウな振る舞い
- ②敵兵をキョウゲキする
- ③幸福をキョウジュする
- ④キョウリョウな人物
- ⑤キョウジュンの姿

17

C ヒンシュツリツ

- ①ヒンイを保つ
- ②カイヒン公園
- ③セキヒンの暮らし
- ④事件がヒンパツする
- ⑤コクヒンを迎える

18

D カンベン

- ①カンを尽くす
- ②カンにして要を得る
- ③別人のカンがある
- ④カンに堪えない
- ⑤忙中カンあり

19

E ジョウホ

- ①気運をジョウセイする
- ②ジョウジツがからむ
- ③肥沃なドジョウ
- ④ジョウチョウな文章
- ⑤ケンジョウの美德

20

問二 空欄 ア・イ・ウ に入るものを、次の各群の①～④の中から、それぞれ一つずつ選べ。

ア

①ことば

②あかし

③まよい

④ゆえん

21

イ

①手詰まり

②迷宮入り

③立ち消え

④もの別れ

22

ウ

①砕けた

②曖昧な

③乱れた

④幼稚な

23

問三 傍線部 (a)・(b) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 興が乗って

①調子に乗って失言すること

②興味を持って熱弁すること

24

③おもしろくなって夢中になること

④うっかり口をすべらすこと

(b) 仄見える

①しかと見えること

②わずかに窺えること

25

③隠しようがないこと

④おのずと見えてしまうこと



問四 傍線部(一)「怪つ態なコトバ」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 関西人が気まぐれに用いる標準語のこと
- ② お芝居のセリフのように白々しい生命力を失った言葉のこと
- ③ 標準語の中に大阪弁の特色がにじみ出してしまう不自然な言葉のこと
- ④ 大阪人の祖父の感覚には合わない上品で気取った標準語のこと

26

問五 傍線部(二)「もしわてが死んだらもらいはるやろな」の川柳の意味内容として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① もし、俺が死んだなら、誰が遺産をもらうのだろうかと案じている。
- ② もし、私が死んだなら、夫はきつと後妻を迎えなさるだろうと推し量っている。
- ③ もし、僕が死んだらば、彼女は何を形見にもらいたいだろうかと考えている。
- ④ もし、私が死んだらば、夫は寂しさに養女をもらうだろうと予測している。

27

問六 傍線部(三)「新式考案ツーピース仕立てキモノ」という比喻の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

28

- ①一枚仕立ての着物の着付けは難しいが、上下に分かれているツーピース式ならば着やすいように、敬語もある語を別の一語に置き換えて敬意を表すよりは、普通の語の後に敬意を表す語を付けて、語尾だけ標準語にする方が容易であることという。
- ②ツーピース式の着物は、一見すると普通の着物に見えるが、実は上下に分かれていて、それを帯によって隠しているように、上方弁では「はる」に敬意を込めつつ語尾は通常の標準語にしているために、敬語は目立たないことをいう。
- ③ツーピースという洋服を仕立てる発想を、日本の和装着物の仕立てに用いた和洋折衷方式は、普通動詞に敬意の助動詞を付けることによつて、自在に敬語を造り出す上方弁独特の表現方法に通じることをいう。
- ④新式考案のツーピース仕立ては、伝統的な着物とは異なる仕立てという意味で「キモノ」とカタカナ表記しているように、上方の敬語は標準語の敬語よりも略式で、正式な敬語とは全然ちがうものであることをいう。

問七 本文の主旨として適当でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

29

- ①大阪弁の小説は、登場する男性が女の言葉を使うと嫌う読者がいるのは、小説に不慣れなことにもよるが、上方弁には男女ともに使う言葉があるせいである。
- ②大阪弁に限らず、上方で語られる日常の言葉が生き活きとして面白いのは、語尾の多様性によるところが大きいと言えるのではなからうか。
- ③上方で敬語に用いられる「はる」は色々な場面で用いることが出来て便利な言葉であるが、どの動詞につくかを決めかねる点が難しい。
- ④明治政府が学校教育を普及させ、標準語の使用を奨励した結果、急速に共通語が全国的に広まり、大阪弁は下品な言葉だと思ふ気風も生まれた。

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ジュユウ

- ① ジュドウ的な性格
- ② 労働のジュバクから逃れる
- ③ ジュキョウ思想を学ぶ
- ④ ヒツジュ品をそろえる
- ⑤ 卒業証書をジュヨされる

1

B キノウ

- ① 人生のテンキとなる
- ② キカイな夢にうなされる
- ③ 数学的キノウ法
- ④ キカイ体操の競技会
- ⑤ キガイを加える

2

C テイコウ

- ① テイクウ飛行
- ② テイコク主義戦争
- ③ 法律にテイシヨクする
- ④ 会議をテイコクに始める
- ⑤ テイボウを建設する

3

D ヤケイ

- ① ケイサツ官にあこがれる
- ② ケイカン条例を審議する
- ③ ケイベツに値する行為
- ④ 大企業のケイエイ者
- ⑤ ケイカクを立てる

4

E ホウシユウ

- ① ホウモン販売
- ② ニュースのゴホウを詫びる
- ③ 施政ホウシン演説
- ④ ホウカツ的な条約
- ⑤ コクホウ級の展示物

5